

## 公開シンポジウム

# 「グローバル化の時空」に寄せて

神奈川大学経済貿易研究所長

沢田 幸治

『経済貿易研究』の特集として以下に掲載したのは、2003年7月18日、神奈川大学経済貿易研究所が主催した公開シンポジウム「グローバル化の時空」での報告と討論をもとに、それぞれの報告者・討論者によって加筆補正されたものである（したがってシンポジウムを再現した正確な記録とは異なることをあらかじめお断りしておきたい）。このシンポジウムは、神奈川大学共同研究奨励助成による経済貿易研究所の2つの研究プロジェクト、「『市場経済のグローバル化』をめぐる諸相と諸問題に関する研究」（2001年度～2002年度）および「『帝国』の成立と新世界秩序」（2003年度～2004年度）が積み重ねてきたオープンな共同研究の一環として行われ、両プロジェクトのこの時点での研究成果のひとつとすることができる。

この2つの研究プロジェクトは、「グローバル化」と「帝国」をキーワードに、激動し混迷を深める今日の時代を理解しようとする試みだが、自由や民主主義や市場といった言葉と同じように、これらも、共通に了解された自明な概念というわけではない。しかしこのシンポジウムがめざしたのは、言葉の定義それ自体を多少なりとも明らかにするということではなく、これらを媒介に、冷戦体制の終焉と社会主義国家のあいつ

ぐ崩壊など、世紀をまたいだこの10年余りの世界の大きな変動の現代的意味を問うことにあった、とあってよい。

このシンポジウムには学内外から70名をこえる参加者があり、伊豫谷登士翁氏（一橋大学）、上川孝夫氏（横浜国立大学）、石井伸一氏（神奈川大学）の3人の報告と、それにつづく鳴瀬成洋氏（神奈川大学）のコメントのあとに、参加者をまじえて活発な議論がかわされた。むろん、あわせて4時間におよぶこのシンポジウムによって「グローバル化」にかかわるすべての問題が解明されたわけではないが、少なくとも、考えなければならぬいくつもの論点が明確になったことは大きな収穫といえるだろう。

経済貿易研究所は、その社会的責務を果たすべく、今後もこうした学内外へ開かれたシンポジウムや研究会、出版活動に取り組んでいきたいと考えている。この特集が、専門領域を異にする研究者の知的関心の一端にでも交差することがあれば、幸いである。

最後になりましたが、お忙しいなか、シンポジウムの報告を快くお引き受けくださった伊豫谷登士翁、上川孝夫の両氏にあらためて心からお礼を申し上げます。